

発刊にあたって

北 雄介

「デザイン学論考」編集長
京都大学学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット特定助教

京都大学デザインスクールが始まって、1年が過ぎました。振り返ると本当にいろいろなことがありました。デザイン学ユニットの教員の末席に身を置き、私自身の最も大きな変化は、「デザイン」なるものについて常に考えるようになったことです。デザインとは何か、デザインの評価はいかにして可能か、デザインとエンジニアリングの違いは何か、デザインとアートについてはどうか、またデザイン「学」とはどのようなものでありうるか。デザイン概念は多様なことから関連し、その境界も構造も不明瞭であることから、必然的に多様な問いをはらむものになるようです。おそらくデザインスクールという大きな器の中でそれぞれの教員や学生が、それぞれの視点から、デザインなるものに思慮を巡らせていることと思います。

2年目を迎えるにあたり、そうしたデザイン学に関する所感や構想を、論じ合う場をつくりたいと考えました。しかも、学問として着実に蓄積されるような形式をとりたいと思いました。そこで近しい先生方にお声掛けし、こうして「デザイン学論考」という小誌を編むことになりました。「京大のデザイン学とは結局何ですか」と聞かれることがよくあり、なかなか一言では答えづらいものではありませんが、教員や学生たちが自ら記すこの論考集が、その問いに答える語り部になればと考えています。

「デザイン学論考」では、デザイン学に関わる学内外の皆様から、広く原稿を募集いたします。ただし創刊号については内容もフォーマットも全く決まっていないものでしたから、編集部メンバーを中心に「とりあえず各自書きたいことを書きながら、全体を考えてみる」ことにしました（reflection-in-actionですね）。結果的に、デザイン学の豊かさを反映してか、多彩な論考が揃ったと思います。教員4名（不肖にも私が露払いを命ぜられました）、そしてデザイン学1期生も2名登場します。これを読んで「我こそは」と思われた方は、巻末の要項をお読みになり是非とも原稿をお寄せください。

本誌が、自由闊達な議論の場になることを願っております。